

大学生における「いじり」の対象者と傍観者の 認識の違いと対処法の違いについての研究

山 崎 鞠(人文学研究科臨床心理学専攻修士2年)

目 的

「いじり」は親密な他者との関係の確認のための行為という肯定的な面を持つ一方で、「いじめ」につながってしまうという否定的な面を持つと考えられている。しかし「いじり」の当事者以外からは指導対象として判断することが難しく、教育現場でも「いじり」の研究は深まっていない傾向にある。

本研究では、「いじり」対象者と傍観者の両方の立場から、「いじり」の認識の差異を明確にすることを 1 つの目的とする。また、「いじり」の対象者と傍観者という異なる立場によって、どのような対処法がとられやすいのかについても探る。

方 法

調査対象者 私立大学大学生 89 名(男性 47 名、女性 42 名、平均 20.69 歳(SD=1.35))。

質問紙 ①SD 法を用いて「学校におけるいじり」と「学校におけるいじめ」についてのイメージを SD 法で回答して貰った。SD 法の形容詞対は井上(1985)の質問紙調査において、使用頻度の高い形容詞対 36 個を用いた。②特定の状況におけるいじりに対する反応を見るために、「いじり」の対象者と傍観者の 2 つの立場を設定し、「いじり」場面を想起できるようなエピソード文を 2 種類(エピソード 1、エピソード 2)作成した。そして各エピソードの「いじり」への対処行動を尋ねる 10 項目の質問を設定し、5 件法で回答を求めた。最

後に各エピソードについて、回答者が「いじり」

と「いじめ」のどちらととらえたか 4 件法で回答を求めた。

③自由記述によって「いじり」の実行者・対象者・傍観者の各立場の経験の有無について回答して貰った。また各立場での経験について、答えられる範囲で具体的な記述を求めた。

結 果

「いじめ」と「いじり」の印象について、主因子法(バリマックス回転)による因子分析を行った($n=89$)。分析の結果、「いじり」は「行為のネガティブな印象」、「実行者の軽薄な態度」、「対象者の消極的なイメージ」、「鈍感さ」の 4 因子構造となった($\alpha=.95$ 、 $\alpha=.84$ 、 $\alpha=.69$)。「いじめ」は「行為のネガティブな印象」、「対象者の消極的なイメージ」、「実行者の愚かな態度」の 3 因子構造であった($\alpha=.90$ 、 $\alpha=.70$ 、 $\alpha=.70$)。累積寄与率は「いじり」が 57.71%、「いじめ」が 47.43%であった。

各エピソードと立場の対処行動の違いについて、エピソード 1 の対象者では「受け流して相手にしない」等の行動が多く選択された。傍観者では「その話題に触れないようにする」、「友人を励ます」等の行動が多く選択された。エピソード 2 の対象者では「他の友人に相談する」等の行動が多く選択された。傍観者では「相談に乗る」等の行動が多く選択された。

さらに 2 つのエピソードで各立場に共通していた 6 つの対処行動の平均値比較を、対応のある t 検定を用いて行った。その結果を Table1 と Table2 に示した。

Table1 共通する対処行動の比較

共通する項目	対象者 傍観者		t値
	M(SD)	M(SD)	
嫌な気分になったことをその場にいた皆に伝える。	2.64(1.25)	2.73(1.09)	-.624
受け流して相手にしない。	3.5(1.10)	2.9(1.13)	4.055 ***
聞こえないふりをする。	2.93(1.20)	2.63(1.17)	2.104 *
他の友人に相談する。	2.9(1.38)	1.98(1.12)	6.062 ***
先生に相談する。	1.44(0.92)	1.36(0.79)	1.123
親に相談する。	1.67(1.06)	1.30(0.71)	4.062 ***

※ +p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

Table2 共通する対処行動の比較

共通する項目	対象者 傍観者		t値
	M(SD)	M(SD)	
嫌な気分になったことをその場にいた皆に伝える。	2.61(1.23)	2.55(1.09)	.472
受け流して相手にしない。	2.67(1.22)	2.30(1.12)	2.971 **
聞こえないふりをする。	2.35(1.22)	2.17(1.15)	1.348
他の友人に相談する。	2.92(1.47)	2.31(1.29)	3.983 ***
先生に相談する。	2.69(1.51)	2.32(1.37)	2.842 **
親に相談する。	2.29(1.49)	1.68(1.01)	4.167 ***

※ +p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

また、各エピソードに対する認知の違いによる対処行動の違いを検証するため、項目ごとに一元配置分散分析を行った。その結果、各エピソードに対する認知の違いによって選択される対処行動が異なる可能性が示唆された (Table3)。

Table3 認知の違いによる対処行動の比較

質問項目	いじり(1)	どちらかという といじり(2)	どちらかという といじめ(3)	いじめ(4)	F 値	多重比較
	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)		
エピソード1 対象者の立場						
怒りを顔に出して反撃する。	2.31(1.14)	2.20(1.13)	2.61(1.29)	3.60(1.67)	2.263 +	2/4
笑いながら、からかいに乗ってあげる。	3.81(1.17)	2.79(1.08)	2.44(1.29)	1.60(0.89)	6.613 ***	2/1,3<1,4<1
聞こえないふりをする。	2.44(1.03)	2.80(1.11)	3.61(1.29)	3.00(1.41)	3.258 *	1/3,2<3
エピソード1 傍観者の立場						
先生に相談する。	1.50(1.27)	1.36(0.58)	1.10(0.40)	2.75(1.71)	6.398 **	1/4,2<4,3/4
エピソード2 対象者の立場						
嫌な気分になったことをその場にいた皆に伝える。	1.33(0.58)	2.33(0.97)	2.57(1.19)	3.05(1.50)	2.346 +	
怒りを顔に出して反撃する。	1.67(0.58)	1.95(0.97)	2.41(1.19)	3.35(1.60)	4.991 **	2/4,3/4
笑いながら、からかいに乗ってあげる。	3.67(0.58)	2.24(1.18)	2.05(1.00)	1.50(0.95)	4.600 **	3/1,4<1
エピソード2 傍観者の立場						
愛想笑いをして楽しんでいる振りをする。	3.50(0.71)	2.15(0.90)	1.84(0.86)	1.52(0.81)	4.068 *	3/1,4<1
受け流して相手にしない。	1.50(0.71)	2.92(0.86)	2.11(0.99)	2.33(1.39)	2.201 +	
他の友人に相談する。	2.50(2.12)	2.15(1.34)	2.61(1.28)	1.71(1.10)	2.491 +	4/3

※ +p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

自由記述では以下のような記述が見られた。

実行者 「いじり」を“ポジティブなコミュニケーション”にとらえ、“いじられる側への配慮”した上で「いじり」を行っていることが示唆された。また“悪気がなく”「いじり」が行われている可能性が示唆された。

「いじり」が対象者との“親しい関係”を前提と

して行われている可能性が示された。

対象者 「いじり」により“ネガティブな認知や感情”が喚起される者がいる一方で、“救済”や“配慮”と感じる者もいることが示された。また、矛盾する感情が同時に喚起される可能性も示された。また、相手との関係や「いじり」の内容によって“感じ方が変化する”ことが示された。

傍観者 「いじり」の行為を“過剰と感じている”可能性がうかがえた。また「いじり」に“関わりを持たない”、もしくは、冷静に“行動を観察している”という、第三者ならではの対処行動を取っている可能性が示唆された。

考 察

因子分析の結果から、行為のネガティブさは「いじめ」の方が高く、「いじり」は「軽薄」で「鈍感」な印象が強いことが考えられた。吉澤他(2013)は「いじり」の印象は当事者間に好意や愛情があるものとしているが、「いじり」はもっと複雑であり、肯定的な行為ととらえる一方で、立場や状況によっては不快感が抱かれやすいという両価性のある概念であるという可能性が示唆された。

立場の違いによる対処法の違いでは、対象者は「いじり」の内容によって、「いじり」に同調するか、状況を回避しようとするか、等の対処行動が異なってくる可能性が示唆された。また、傍観者は、第三者的立場から「いじり」を見過ごそうとする傾向が強いことが示された。一方で、「いじり」の対象者を支援しようとする可能性も示唆された。

しかし、「いじり」が「いじめ」に近いと認知されると、どちらの立場であっても第三者に支援を求め、状況改善を試みるという可能性が示唆された。